わたしたちの

# 大島紬

鹿児島県工業技術センター 奄美市駐在

（旧：鹿児島県大島紬技術指導センター）

# 1. 着物は日本の文化

きものを着る人は、昔からするとずいぶん少なくなってきていますが、私たちの奄美の島々では、今でもまちや村を歩くと機(はた)をおる音が聞こえてきたりします。

そうです、大島紬(おおしまつむぎ)を織(お)る音です。

大島紬は、きものの中でも、とっても高級なものとして全国の多くの人たちに大事にされています。そして、日本を代表するきもののひとつなのです。

お父さん、お母さんや、おじいちゃん、おばあちゃんが持っていたら見せてもらいましょう。

# 2. 大島紬のおこり

奄美の島々は、大和朝廷の時代から琉球王国（今の沖縄県）の統治へと変わり、さらにさつま藩の直轄地となるなど、いろいろな時代をへてきました。

その間、「海上の道の島」として日本本土と、南方や大陸との交易通路として重要な役割を果たしてきました。

そのような中で、南北の文化の影響を受け、大島紬が生まれ、発達してきました。

九州

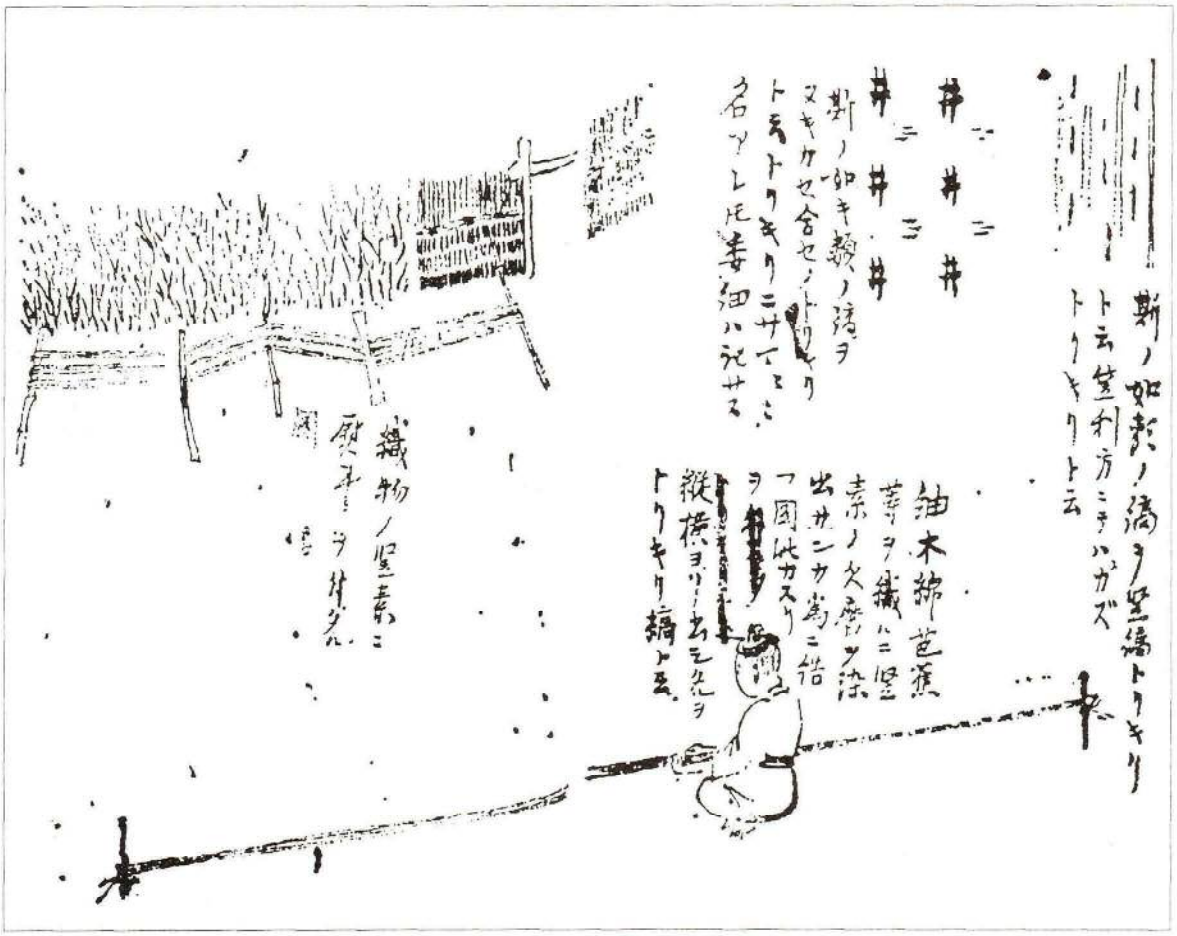
中国大陸

奄美大島

沖縄本島

台湾

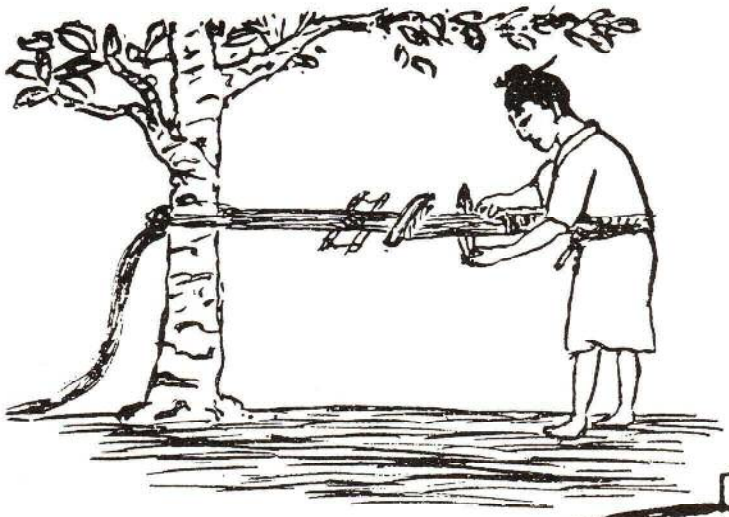
八重山諸島



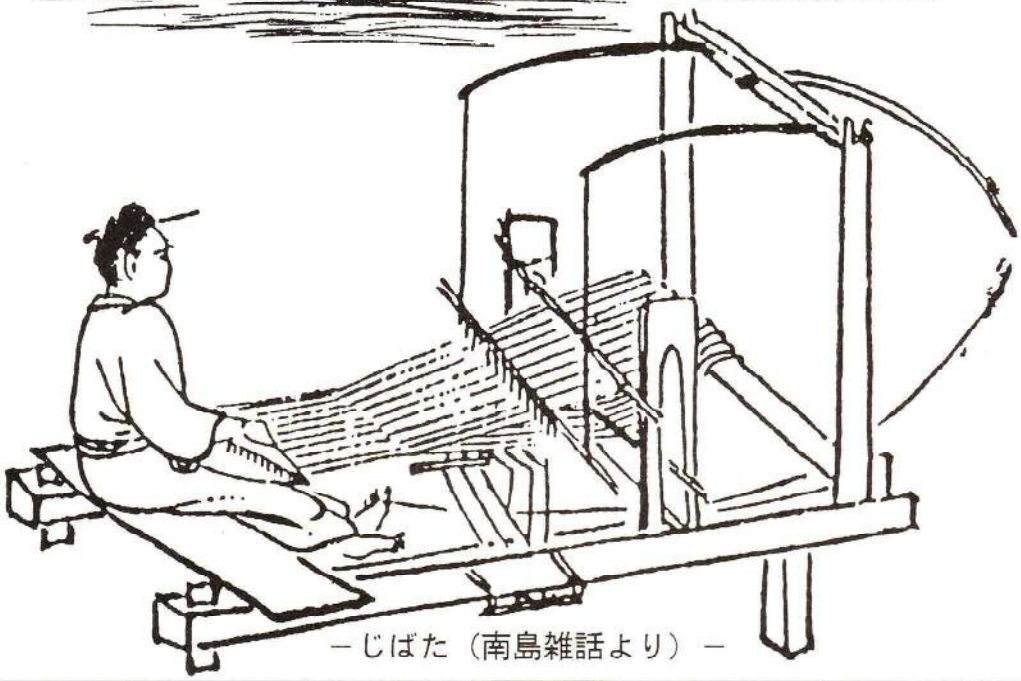
－糸くくり／南島雑話より－

## (1) 大島紬のおこり

奄美大島では、琉球(りゅうきゅう)の影響(えいきょう)を受けて昔からいろいろな材料で布をつくっていましたが、いつのころからか、つむぎづくりをはじめたそうです。はじめのころは、無地(むじ)やかんたんなもようのつむぎをつくっていましたが、やがて、島に多いソテツやハブのうろこを参考にして、複雑なもようのつむぎをつくりはじめました。また、島にあるテーチ木（シャリンバイ）や鉄分の多い田の泥で染める方法を発見して大島独特のつむぎをつくりだしました。

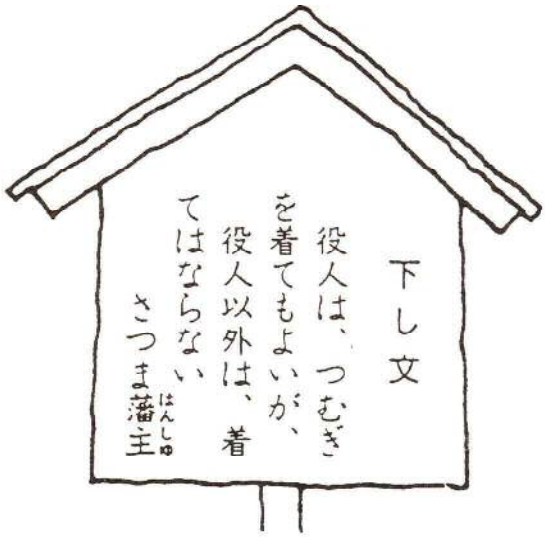


－オンジョを織る－
（奄美生活誌より）



－じばた（南島雑話より）－

このように大島紬は奄美大島の自然を生かして生まれてきました。しかし、こうして生まれた大島紬もさつま藩（はん）に支配されていた時代は、殿さまへのみつぎ物としてだけ作られていたために一般には広まらなかったそうです。

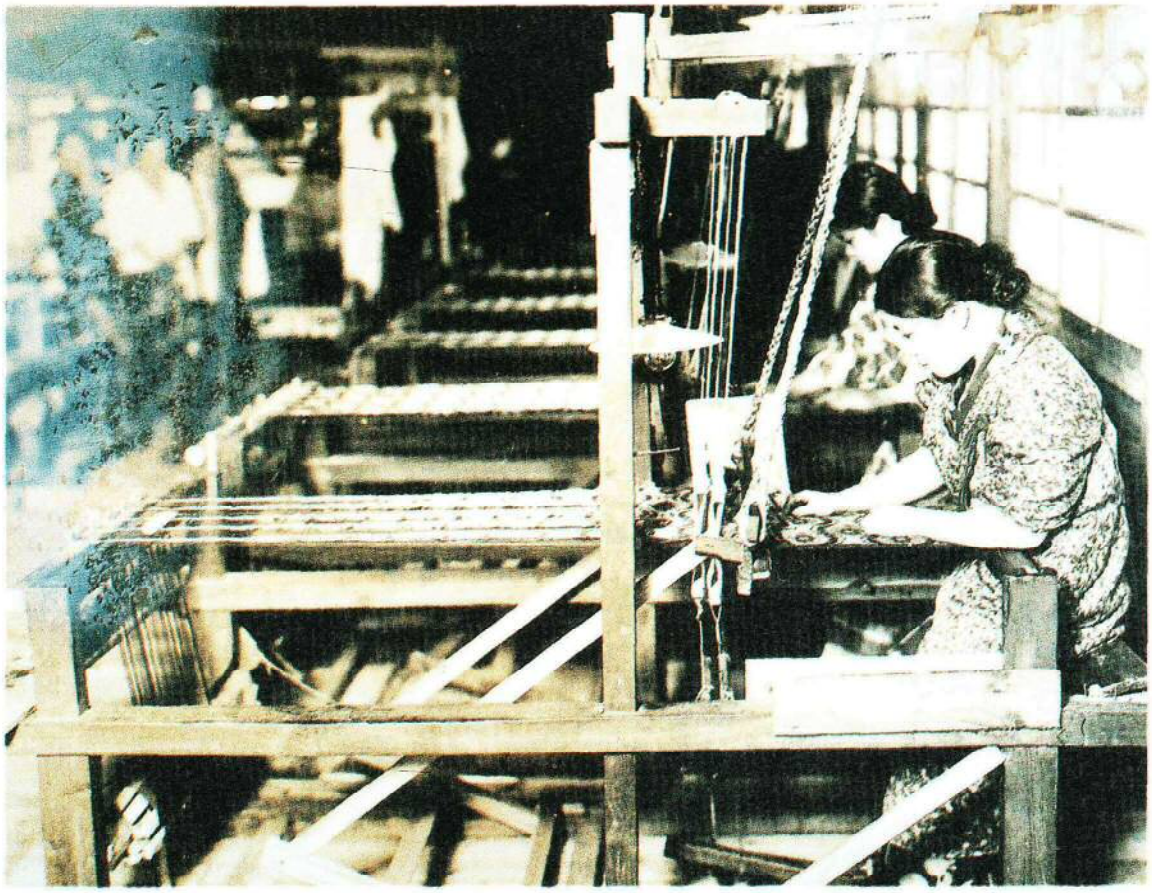



くだしぶみ

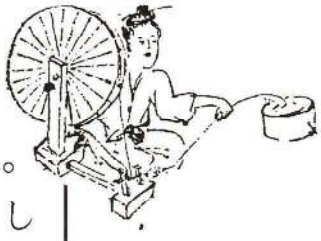
## (2) 大島紬の発展

大島紬が全国に知られ、生産がのびはじめたのは、今から百年ほど前からです。生産がのびる中で、「しめばた」が考え出され、今までよりもさらに細かく美しいもようがつくれるようになりました。また、織(お)りばたも「じばた」にかわって、今と同じような「高(たか)ばた」になりました。

こうして、生産はますますさかんになり、やがて奄美大島だけでなく、鹿児島市を中心とした県本土でも大島紬が生産されるようになったそうです。このようにして、大島紬は、古い伝統を守りながら、たえず新しい工夫を重ねてきたことがわかりました。そのかげには、さとうきびのほかに生活を支える産業があまり発達せず、人々がつむぎづくりにうちこんだことも大きな力となっています。



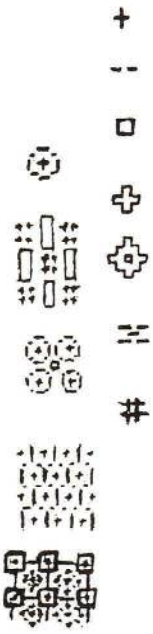
## 大島紬の歴史



700年ごろ ・絹の布を織り始める。

1720年ごろ ・薩摩藩へ納める品として、きびしいとりしまりのもとで生産される。

・絣織物（かすりおりもの）ができるようになる。



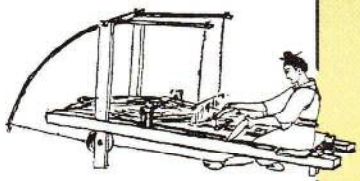
**明治**

3年 ・商品として生産される。

10年 ・大阪の市場で販売されるようになる。

・泥染法はじまる。

・鹿児島でも生産され始める。



28年 ・手紬糸に代わり練玉糸を使い始める。

30年 ・高機で織られるようになり、生産がふえる。

40年 ・しめばたが開発される。

**大正**

10年 ・練玉糸に代わり本絹糸を使い始める。

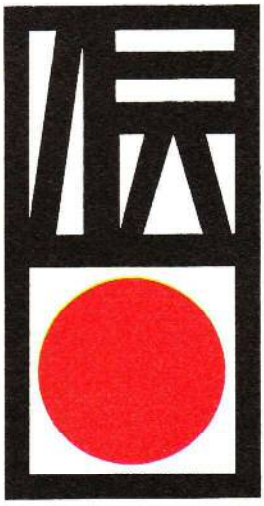
**昭和**

4年 ・県立大島郡染織指導所が名瀬市におかれる。

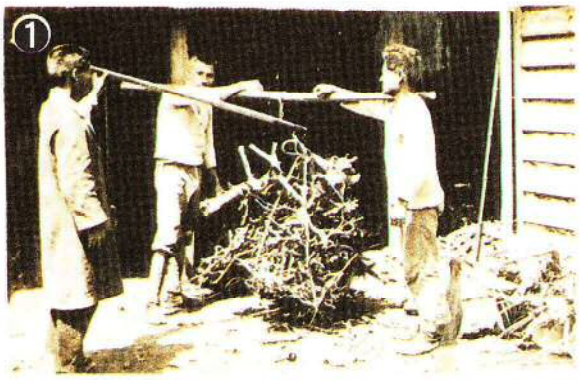
32年 ・いろいろな色の大島つむぎができるようになる。

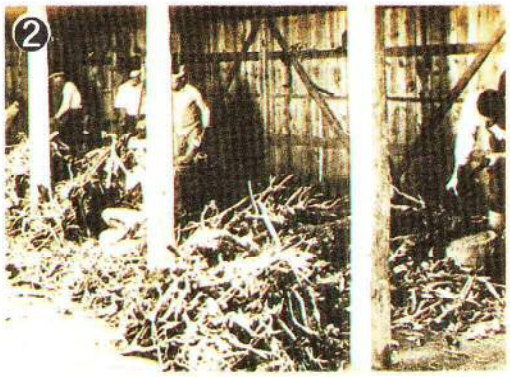
49年 ・鹿児島県本場大島紬協同組合連合会ができる。

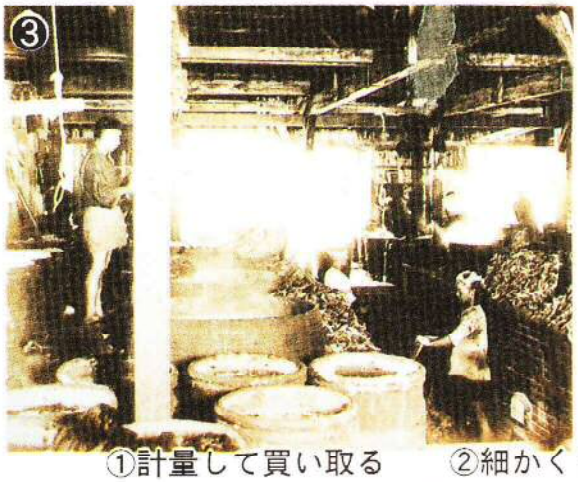
50年 ・国の伝統的工芸品に指定される。

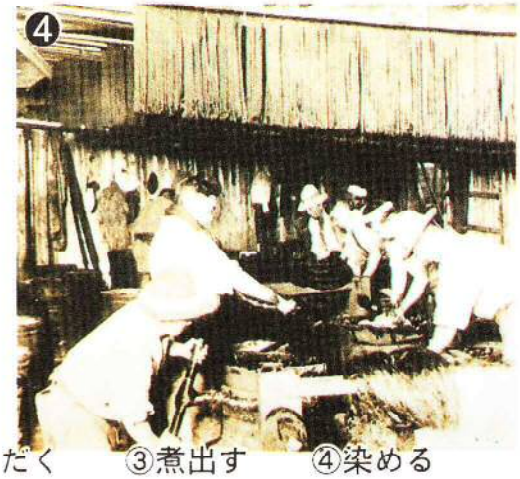


伝統的工芸品のマーク



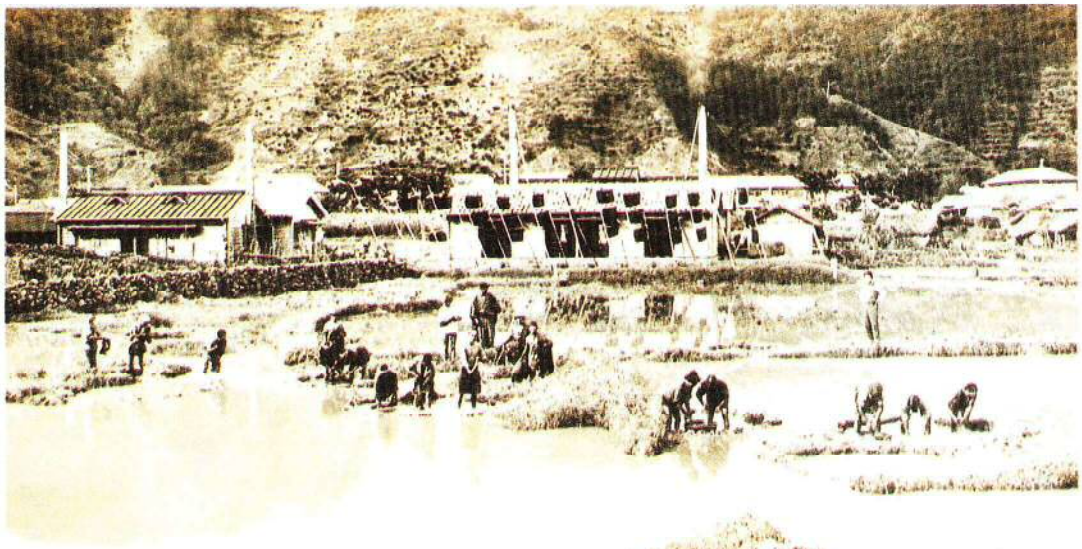



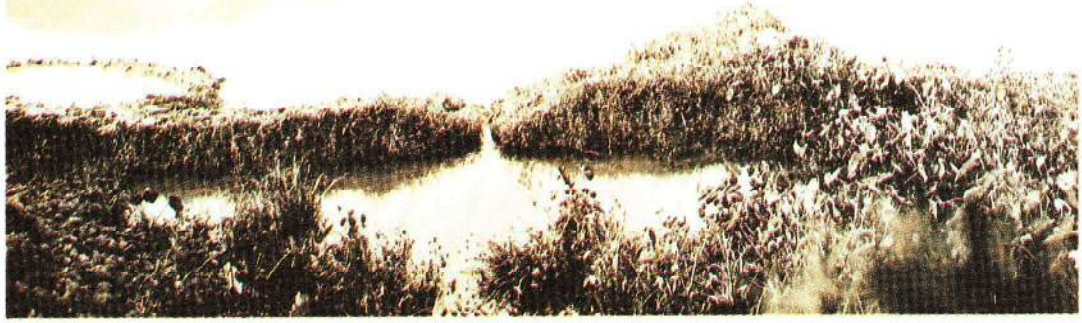




①計量して買い取る　②細かくくだく　③煮出す　④染める

—昔のテーチ木染めのようす—





—昔の泥染めのようす—

# 3. 大島紬ができるまで

大島紬をつくるには、たいへん多くのことを、順序よくしなければなりません。その中のおもなものだけでも、たくさんのことがあります。それらを順序よく見てみましょう。

## ①柄の設計

—もとになる図案—

大島紬をつくるには、設計図の役割をはたすものが必要です。まず、柄や色合いの参考にするもとの図が必要で、これには専門の人が書いた図案が多く使われます。たて糸とよこ糸の組合せで織られるので、ななめの線はかけません。織りあがったもようがななめに見えるものでも、よく見ると、たてとよこの交わった点からできています。。

—柄の設計図—

柄の設計は、もとの図案を見ながら、方眼紙のます目を一つひとつていねいに色づけしていきます。

②糸くり

—糸くり—

糸の準備をします。材料の絹糸をたばにして、お湯でにた後よくかんそうさせます。この糸を「かせ糸」といいます。かせ糸ができたら、糸くりといって小さなわくにまきとっていきます。糸がもつれないように細かなところまで気をくばります。

③はえばた（整経（せいけい））

—整　経—

作品に合わせて、たて糸とよこ糸の長さ、糸の本数（12本～16本）をそろえます。大島紬はできあがりの長さが12.32メートル以上、はばが34.8センチメートル以上と決められています。長さを正確にとること、柄によって糸の本数がちがうので糸が不足したりしないこと、などに気をつけています。

—のりはり—

## ④のりはり

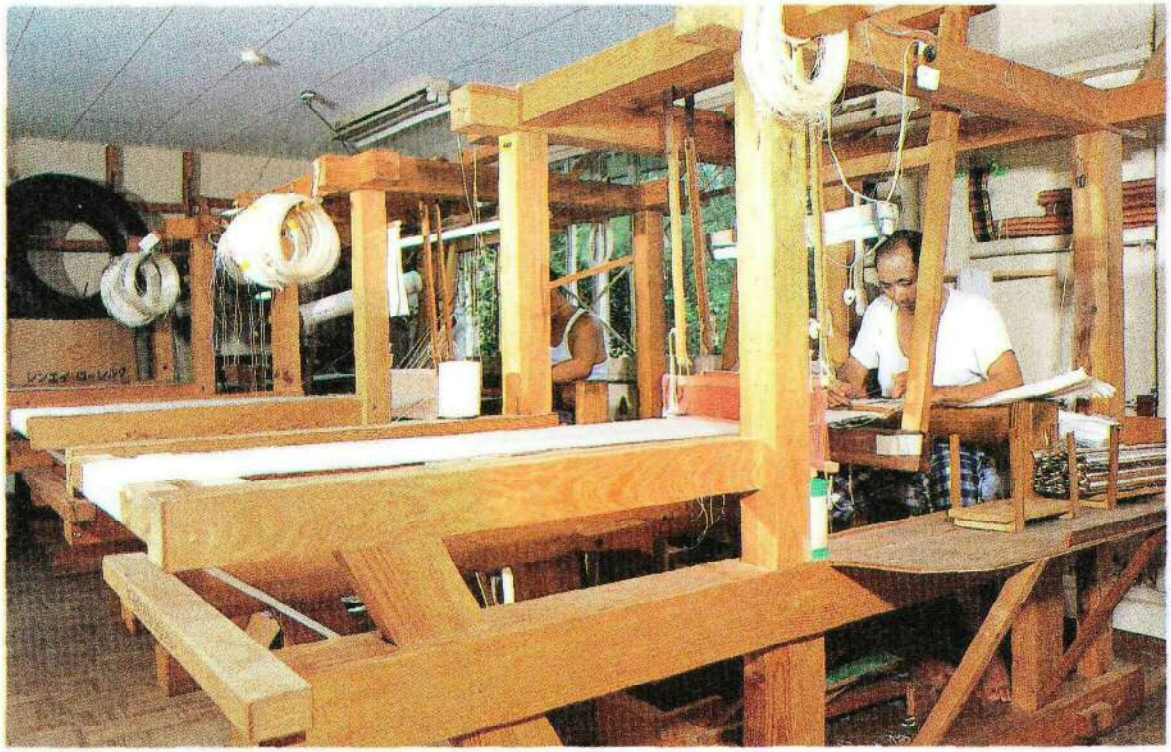
しめばたで、かすりもようを作るためには、はえばたでそろえた糸をのりで固めておかなくてはなりません。たて糸とよこ糸をそれぞれまとめて、いぎすやふのりなどをつけ、日光でじゅうぶんにかわかします。その後、室内で10日間ぐらい自然かんそうさせて、糸のちぢみを一定に落ちつかせます。のりのこさや糸の張りかげんはその日の天候や、風力、湿度(しつど)等に合わせて調節しなくてはならないので、長年の経験とすぐれた技術が必要です。

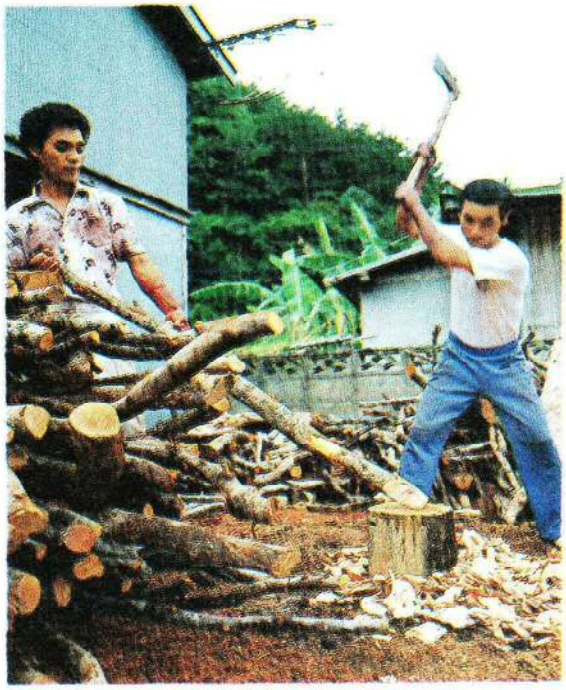
—のりつけ—

## ⑤しめばた

—し　め—

かすりのもようを作る作業です。大島つむぎはきめ細かなかすりの美しさが特ちょうですが、そのひみつは、このしめばたでしめる技術にあるといわれています。図案に合わせながら木綿糸で、絹糸を強くしめていきます。強くしめないときれいなかすりはできません。たいへん力のいる仕事なので、これは男の仕事になっています。しめぐあいは、すべて長い経験できたえた勘（かん）にたよっています。しめぐあいがかたすぎても、やわらかすぎても、染色がうまくいきません。しめられたものを「むしろ」といっています。





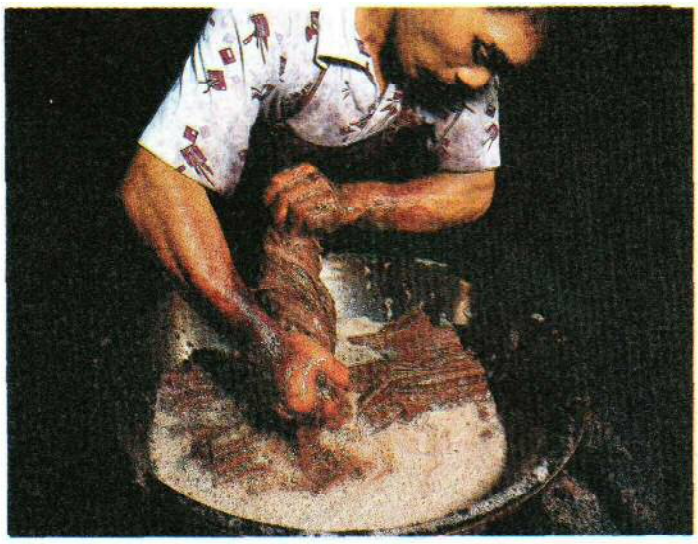
—テーチ木をくだく—

## ⑥染める

大島つむぎの最大の特色は泥染めという染め方にあります。染め方は2つの段階に分けられます。まずテーチ木染めです。

テーチ木というのは奄美の方言で、和名はシャリンバイ（車輪梅）といい、本州から南の地方にはえている木です。これを細かくチップ状にくだいて、大きなかまで10時間から12時間ぐらい煮て、その煮汁をはちにうつし、絹糸を入れてもみこみます。

大島紬には、かすり糸と地糸の2種類があります。かすり糸は、もようを織りなすため、しめばたで織られて「むしろ」の状態で染められます。地糸は単色（一色）で、もようの背景となる糸で束ねたまま染めます。



—テーチ木染め—

どちらも20回から60回もテーチ木の煮汁で染められます。そうすると、テーチ木に含まれているタンニンで糸は茶かっ色に染まります。

—どろ染め—

## ⑦どろ染め

テーチ木で染められた糸やむしろを泥田(どろた)にもっていって、泥田のなかでもみこみます。糸にしみこんでいたテーチ木のタンニン酸(さん)と泥田の鉄分(てつぶん)が反応(はんのう)して黒色に染まります。ただし、どこの泥田でもいいというわけではありません。鉄分を多く含んだ泥田でなければいけないのです。そして、きれいな川で洗い、ふたたび泥田でもみこみます。

これを3回から4回くりかえし、色の染まりぐあいをさらに強くします。こうすることで大島紬特有(とくゆう)の黒色を出すことができるのです。

## ⑧かすりの「すりこみ染色」

最近では、泥あい染めや化学染料染めによりいろいろな色の大島紬もつくられ、「色大島」といわれています。

「色大島」をつくるには、かすりの部分を化学染料で部分的に色分けして染めます。この作業は、「むしろ」のしめをとく前にします。

—すりこみ染色—

しめばたでしめた部分は、染まらずに白いままの色をしています。染めようとする部分の木綿糸をほどいて、この部分に化学染料をすりこみます。

—かすりむしろとき—

## ⑨「しめ」をとく

すべての染色が終わると、木綿糸を全部といて、長い絹糸だけにして「かすり糸」ができあがります。

## ⑩織るまえの準備

染めが終わって、織りに入る前にも、いろいろな準備が必要です。大島紬の糸には、たて糸・よこ糸それぞれに地糸とかすり糸がありますが、この4種類の糸は織りにかかるまでにちがった加工がされて準備されます。（この工程は、後のページの「大島紬のおもな工程」の図に書いてあります。）

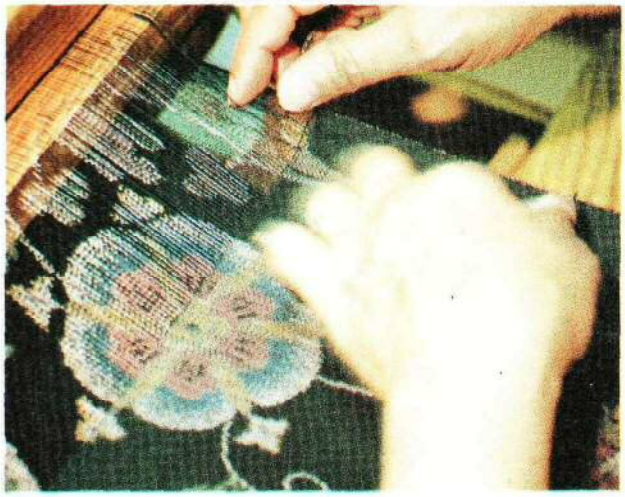
—あげわく—

たて糸は十分気をつけ仕事がされて機にかけられます。よこ糸は、多くの管（くだ）に巻かれて「杼（ひ）」（シャトル）におさめられ、織られます。

—おさとおし—

## ⑪はたで織る

大島紬は「高ばた」という手織り用の機（はた）で織ります。「杼（ひ）」を使って7センチメートルほど織ると、たて糸をゆるめて、一本一本ていねいに針でもようを合わせます。



—かすり合わせ—

はたおり

もようを細かいたて糸とよこ糸で正確に合わせるのはたいへんむずかしい仕事ですが、なれた人の指先は手品師のように動いて美しいもようを正確に作りだしていきます。一反の布を織りあげるまでには、もよう合わせを200回近くくり返さなくてはなりません。たいへん根気のいる仕事なのです。一反の反物を織るのにおよそ40日かかります。

まもなく、織りおえるときが近づくと、気持ちがワクワクするような、とってもしあわせ気分になるそうです。

自分の子供が学校を卒業する時の気持ちにも似ているそうです。

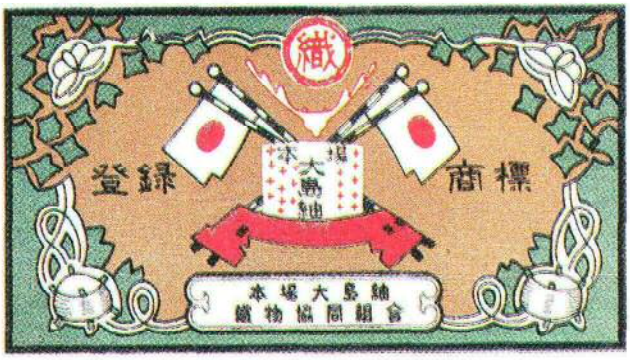
このように、大島紬ができるまでには、たいへん多くのことをしなければなりませんが、どの技術も、身につけるには大変な努力と年月が必要です。そして、力のいるもの、根気のいるものなど、その苦労も様ざまですが、ものを作り上げていく喜びは、かけがえのないものです。

### ⑫検査

織りあげた大島紬は、すべて組合の検査場に持ちこみます。ここでは、よくなれた検査員が、長さ・織りはば・かすりの不ぞろい・色むらなど、20項目もの厳しい検査をして、合格か不合格かを決めます。そして合格したものだけに、一反ごとに、品質(ひんしつ)を保証(ほしょう)する品質表示のマークや商標(しょうひょう)などがつけられます。

奄美産地では「地球印」、鹿児島産地では「旗印」の商標が貼られます。

—検　査—

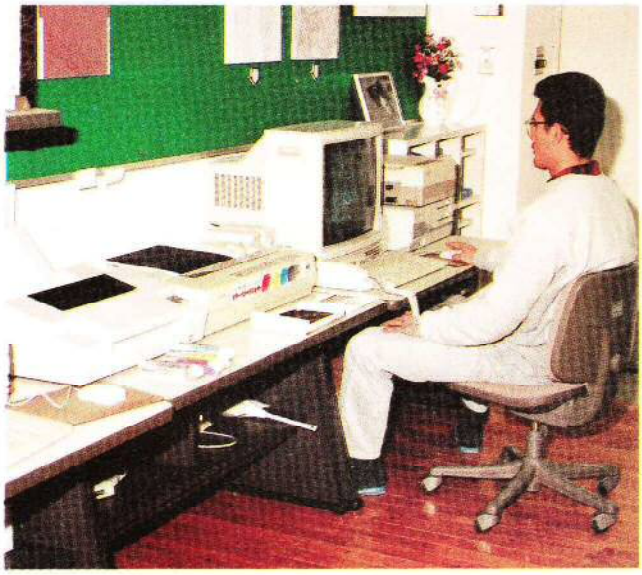



—旗印の商標—

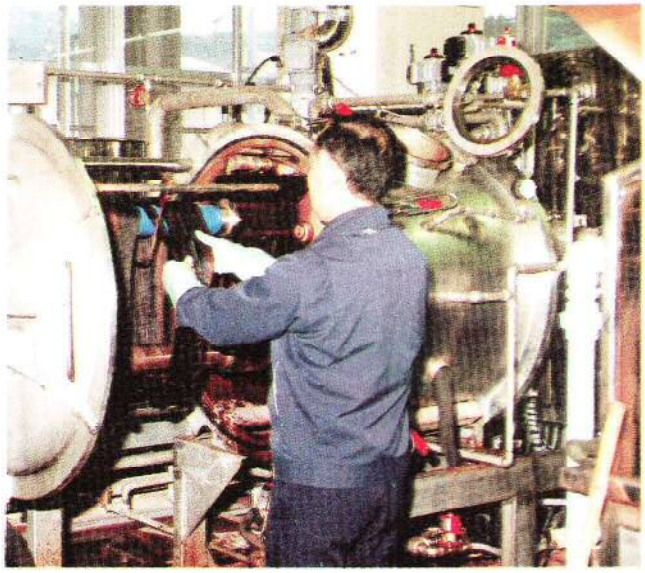
— 地球印の商標 —

# 4. これからの大島紬

「伝統的工芸品」である大島紬はすばらしいものですが、さらによい商品を作るためにいろいろな研究が続けられています。



—コンピュータで図案をつくる—



—テーチ木染めの自動染色装置—
（大島紬技術指導センター）

○コンピュータで図案づくりをする。

○日光に当てても変色しにくい、日光に強い草木染めの開発をする。

○染め、しめ、織りなどの製造工程の改善をする。

○大島紬のドレス、洋服地、小物（ネクタイ、テーブルクロス、かべかけ）などの商品開発をする。

このように、伝統を守りながら、今の時代に合ったいろいろな研究が進められています。

# 5. あとつぎの問題

大島紬のほとんどの工程は、伝統的な技術を持つ職人の手作業によって行なわれています。しかし、職人になるためには、大変な努力と年月が必要です。それに、働く人の平均年齢が高くなってきているため、あとつぎの問題を考えなければなりません。そこで、その解決のためには、「伝統的工芸品」である大島紬のよさをより多くの人に理解してもらい、あとつぎを育てることが大切なのです。

—組合の紬学院の織工養成—

—大島紬の泥染めを見学する小学生たち—

# おわりに

名瀬市では、1月5日を「紬の日」と定めて、広く市民がつむぎを着用する機会をふやすように努めています。その日は、市役所や、銀行などでは大島紬を着て仕事をする人たちが多く見られ、華やかな雰囲気がただよいます。

また、成人の日には、奄美全域で振り袖のきものにかわって、大島紬を着る新成人がふえています。

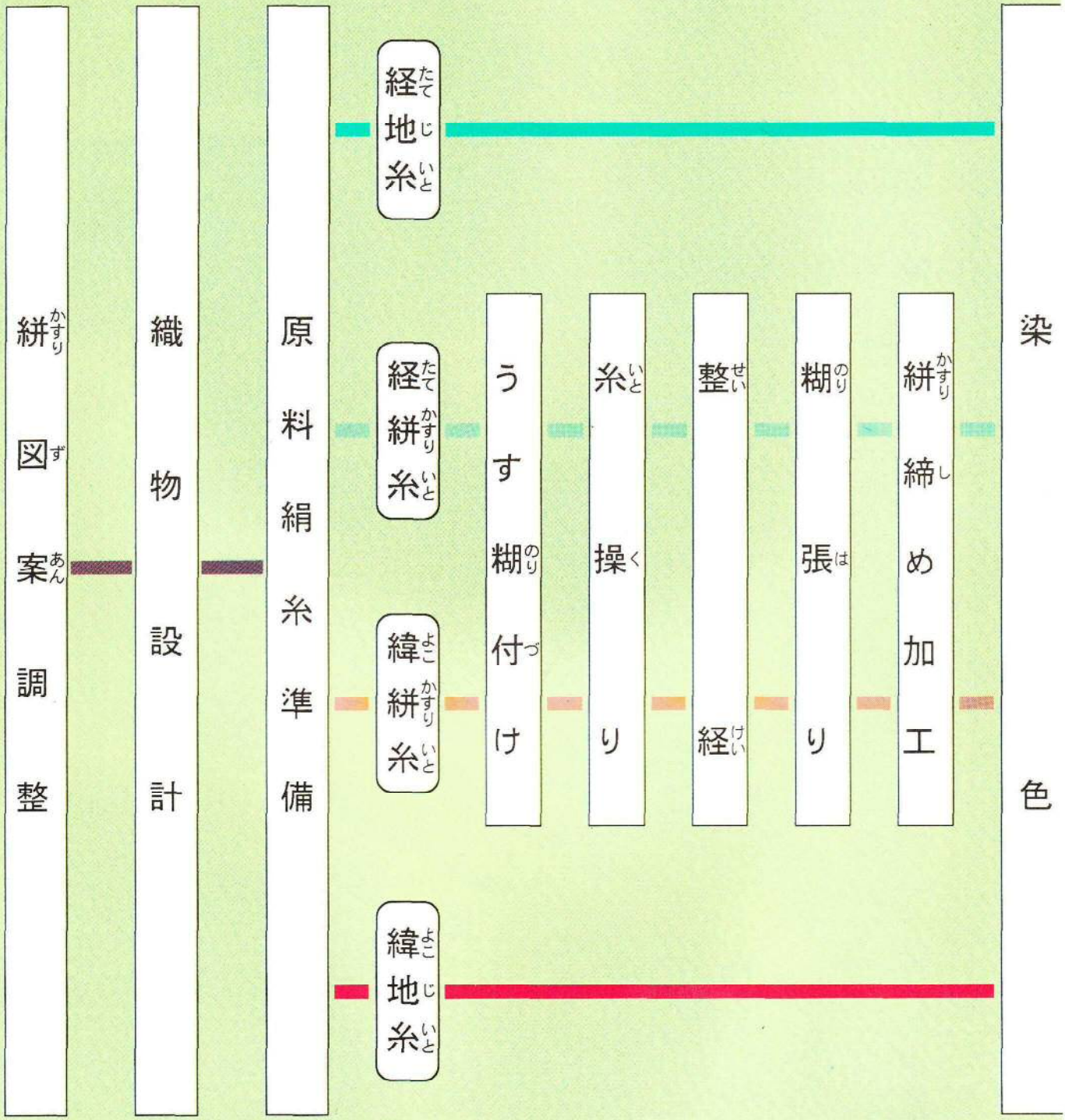
先祖がはぐくんできた大島紬のすばらしさをかみしめ、そして、地元の伝統産業の発展を祈りながら、大人の仲間入りをする記念の日をむかえます。

大島紬は私たちみんなのものです。

大島紬着用が定着した名瀬市の成人式

# 大島紬のできるまで…。

# 大島紬の



# 製造工程

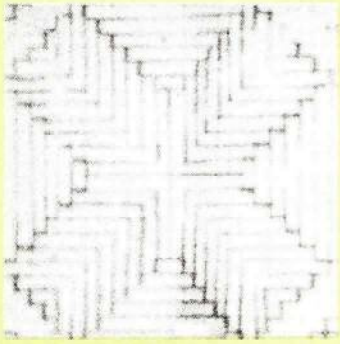
製織
織り付け
綜絖・筬通し
経糸配列
板巻き
地経巻き
絣糸配合
整経
仕上糊張り
管巻き
糸繰り
水洗い
水洗い
管巻き
糊付け
番組
あげわく
油亜美
併むしろ解き

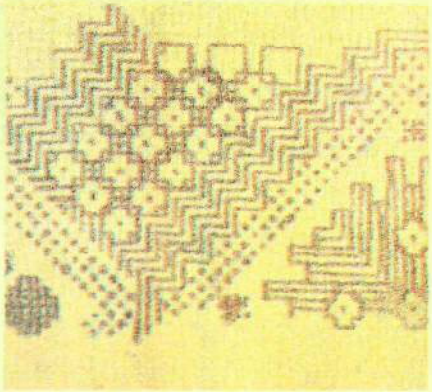
# 図案（ずあん）

大島紬の柄（がら）（もんよう）は、奄美の自然の中の植物や動物をヒントに作られているものが多くあります。ソテツの葉、どくへびハブの皮、亀のこうら、魚の目の例を見てみましょう。

## ソテツ柄

ソテツは、奄美のいたるところで見られます。

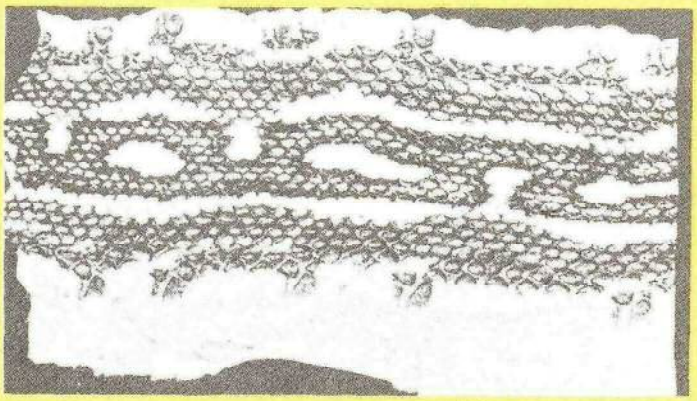




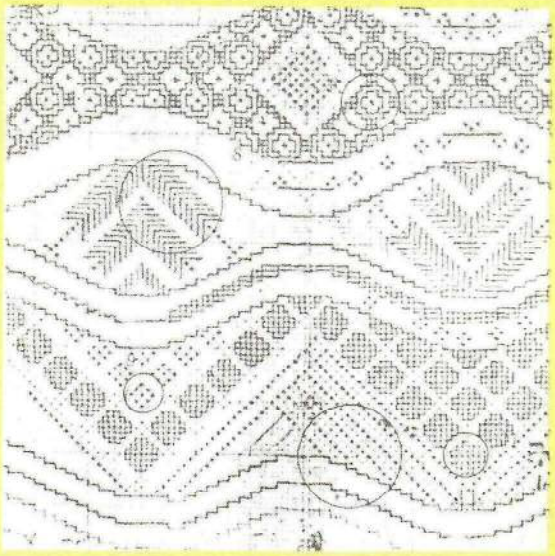
ソテツの葉の形をもんようにした図案です。

ソテツの葉のもんようが使われているたつごう柄（がら）の大島紬

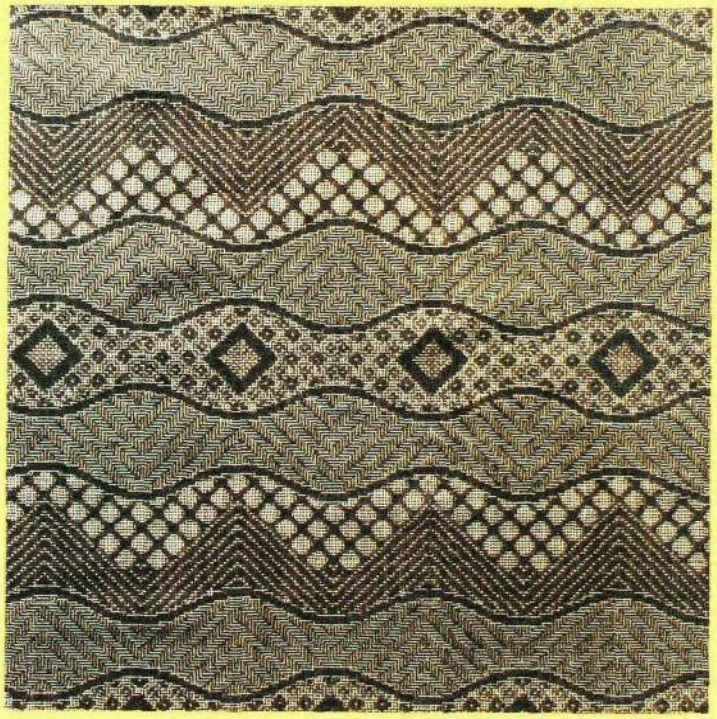
## ハブ柄



ハブの皮も大島紬のもんように使われています。



ハブの柄の図案

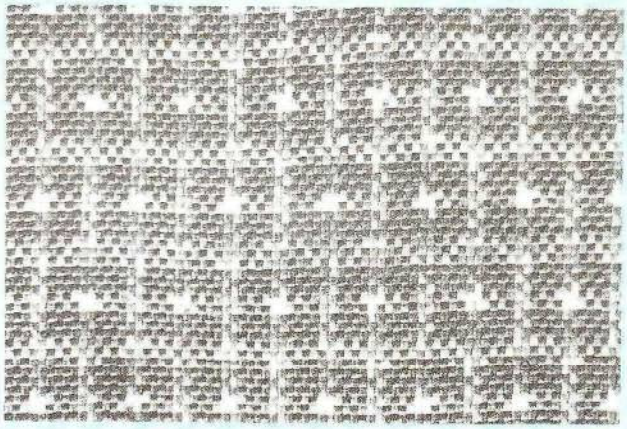


ハブの柄の大島紬

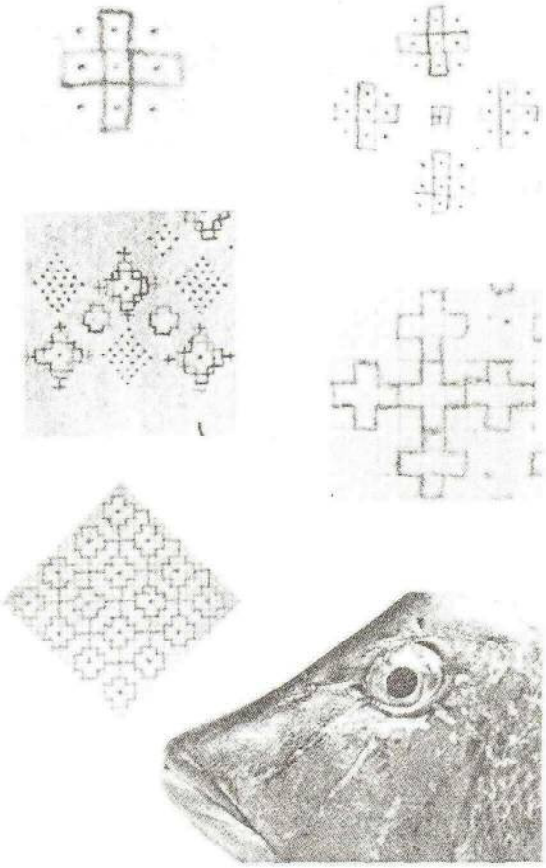
## 亀甲柄

亀甲の柄は男物の大島紬では一番多く使われています。亀のこうらは、長生きの象徴で、めでたいものとされています。

このように、着物の柄には願いを込めて作られたものが多くあります。

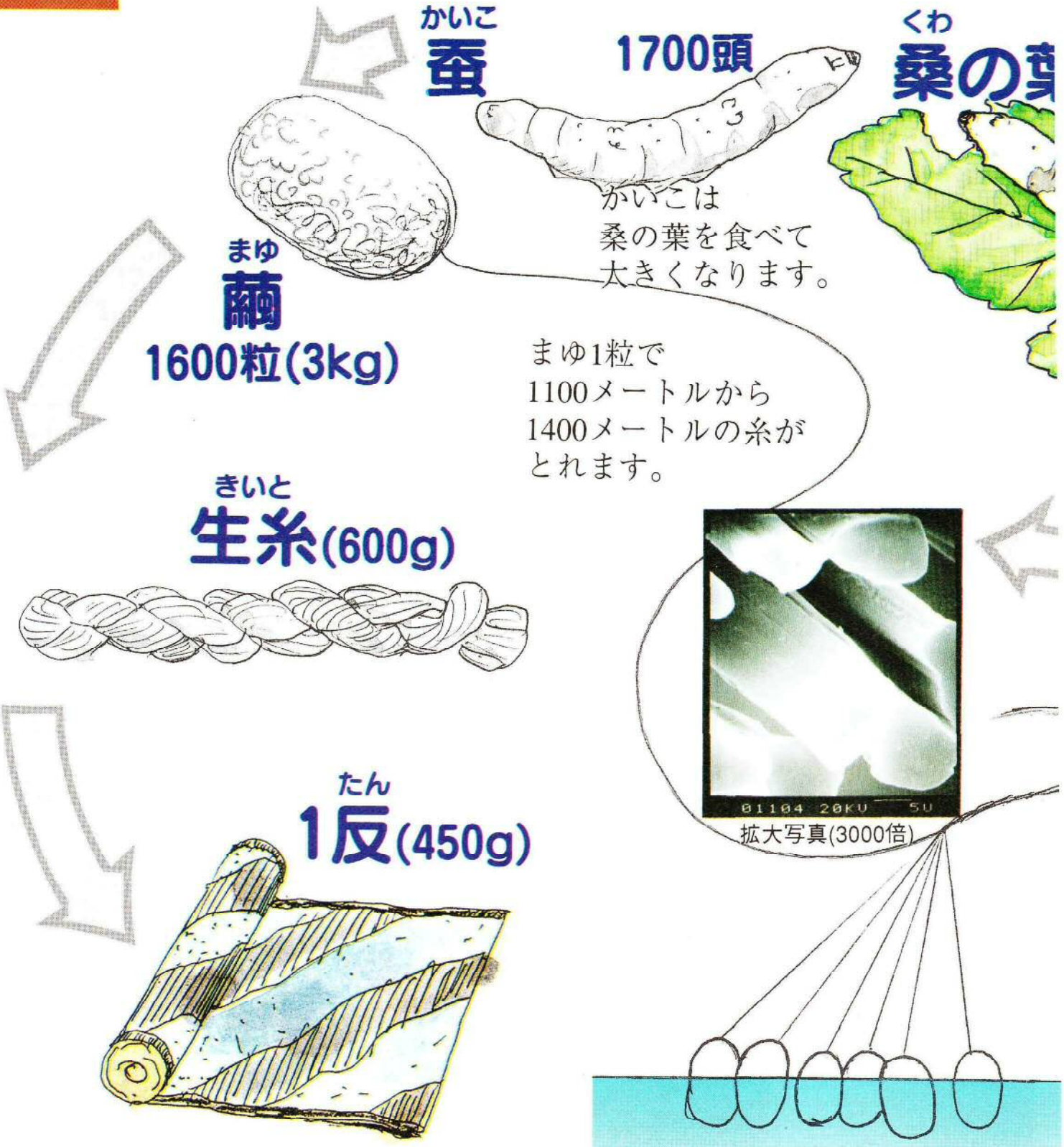


魚の目（イュンム）から考え出された文様



# 糸（いと）

## 着尺（きじゃく）1反（たん）をつくるには



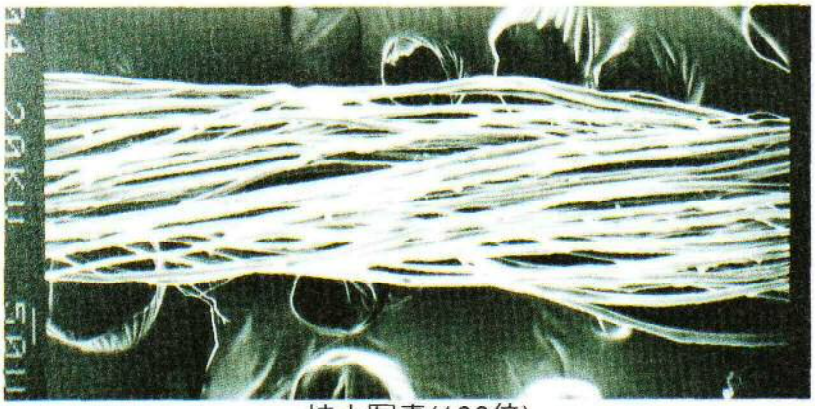

1反の着尺には、まゆの糸にして
2000キロメートルもの糸を使います。
鹿児島から青森よりも遠い距離（きょり）です。

7本程度を束（たば）ねる。
(原糸)

65kg

蚕(かいこ)は卵からかえると4週間ぐらいで成長が終り、2～3日で繭(まゆ)を作りあげる。
その後、蛹(さなぎ)、蛾(が)と姿をかえ、卵を生みます。

原糸をさらに
5～10本束ねる。



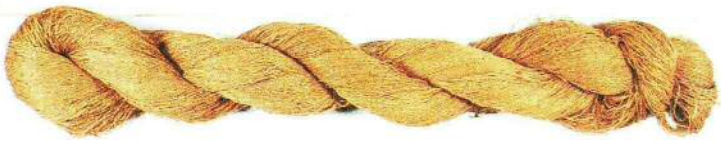
拡大写真(100倍)

大島紬に使われる糸の太さは、だいたい1ミリメートルの3分の1ぐらいです。
まゆの糸を60本ぐらいより合わせて作ります。

# 染め

## 地糸の染色

染める前の絹糸



テーチ木染め
（36回）

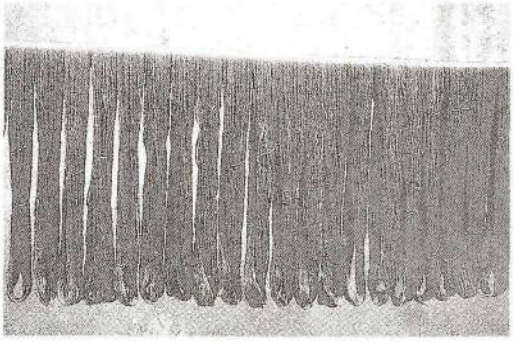
熱液染め6回
テーチ木染め40回
泥染め3回

## 泥染めは大島紬の最大の特徴です

テーチ木

テーチ木を砕いてチップにし、窯にいれて煮つめ、染める液をつくる。

地糸

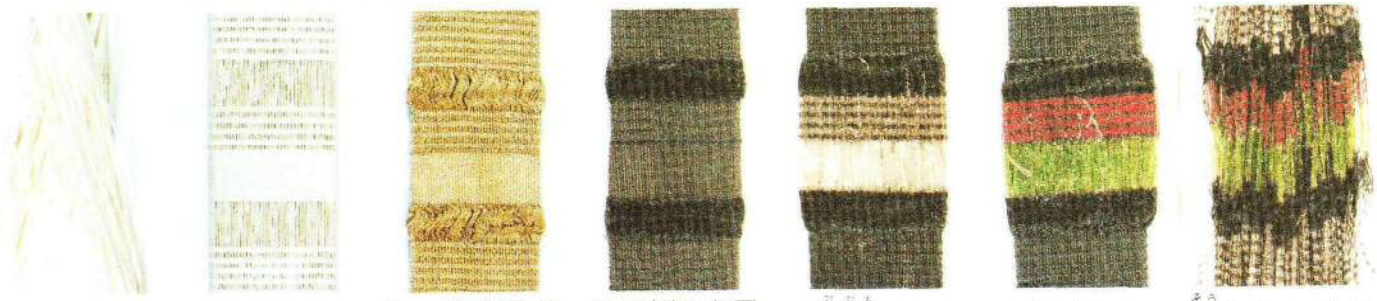


絣糸

染められた糸は外に干して乾かします。

テーチ木で数十回染めた後、泥染めを行う。
このあと、再びテーチ木で何回も染め、また泥で染める。
この工程を何回かくり返します。

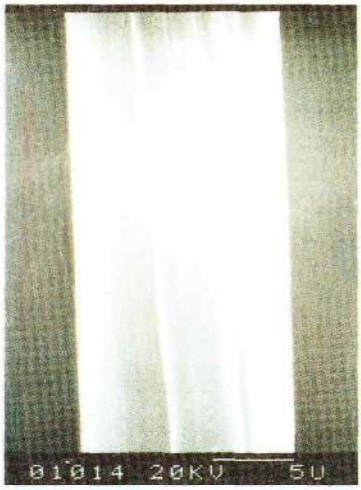
# 絣糸の染色工程（経糸の例）



のりはり　かすりじめ　テーチ木染め（18回）　テーチ木染め（56回）泥染め（4回）　部分とき　すり込み　総ときかすり

煮汁をなべに移し、絹糸を入れてもみ込む

染める前




染めた後

電子顕微鏡で見た泥染めの様子(400倍)

まゆの糸の太さは100分の1ミリメートルぐらいです。染めた後、糸が太くなっているのが分かります。

## 石灰の汁でもみ込む

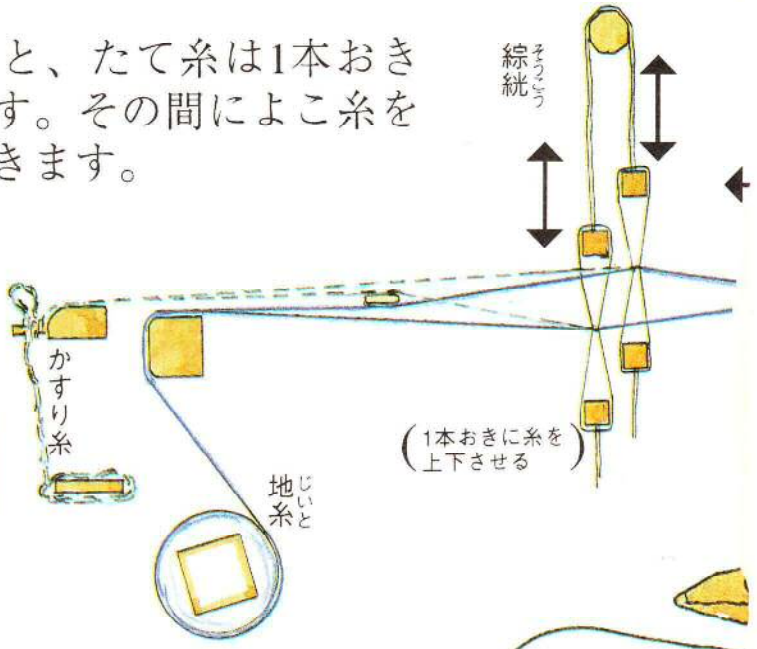
テーチ木で3回染めるごとに石灰の汁でもみ込む
（この工程を何回もくり返す）

## 泥染め大島紬の特徴

- ○暖かい
- ○しなやかな地風
- ○しわになりにくい
- ○素朴で渋い色調
- ○着くずれしにくい
- ○絹ずれの快い音

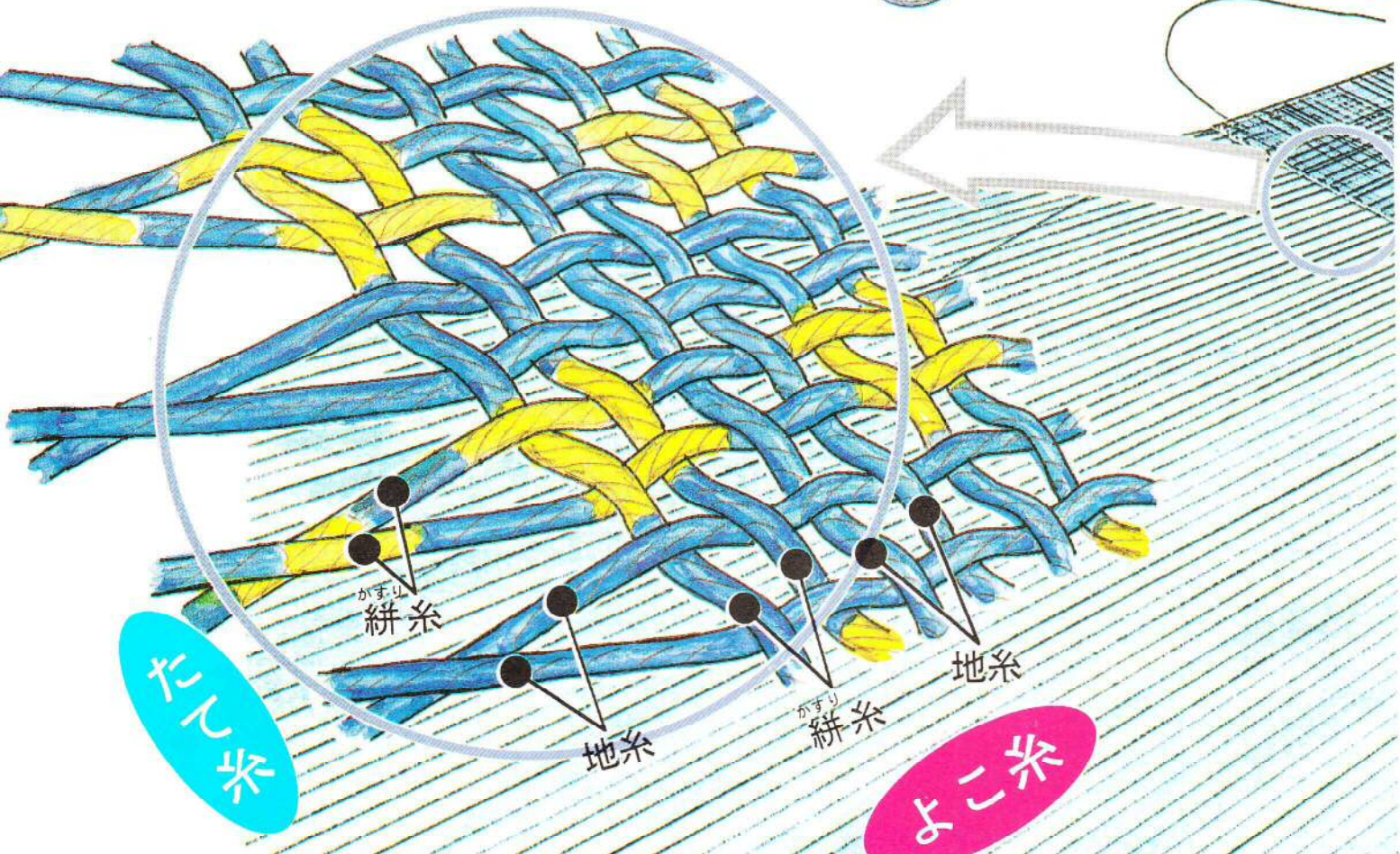
# 織り

そうこうを動かすと、たて糸は1本おきに上下に分かれます。その間によこ糸を通すと平織りができます。

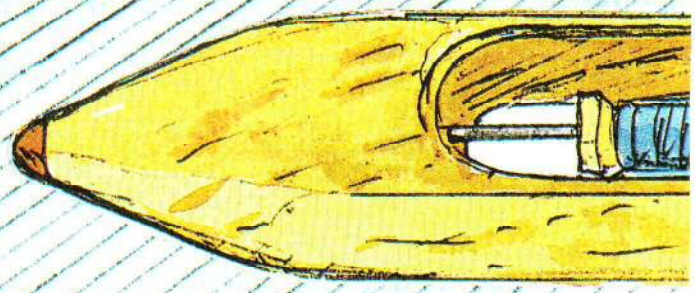


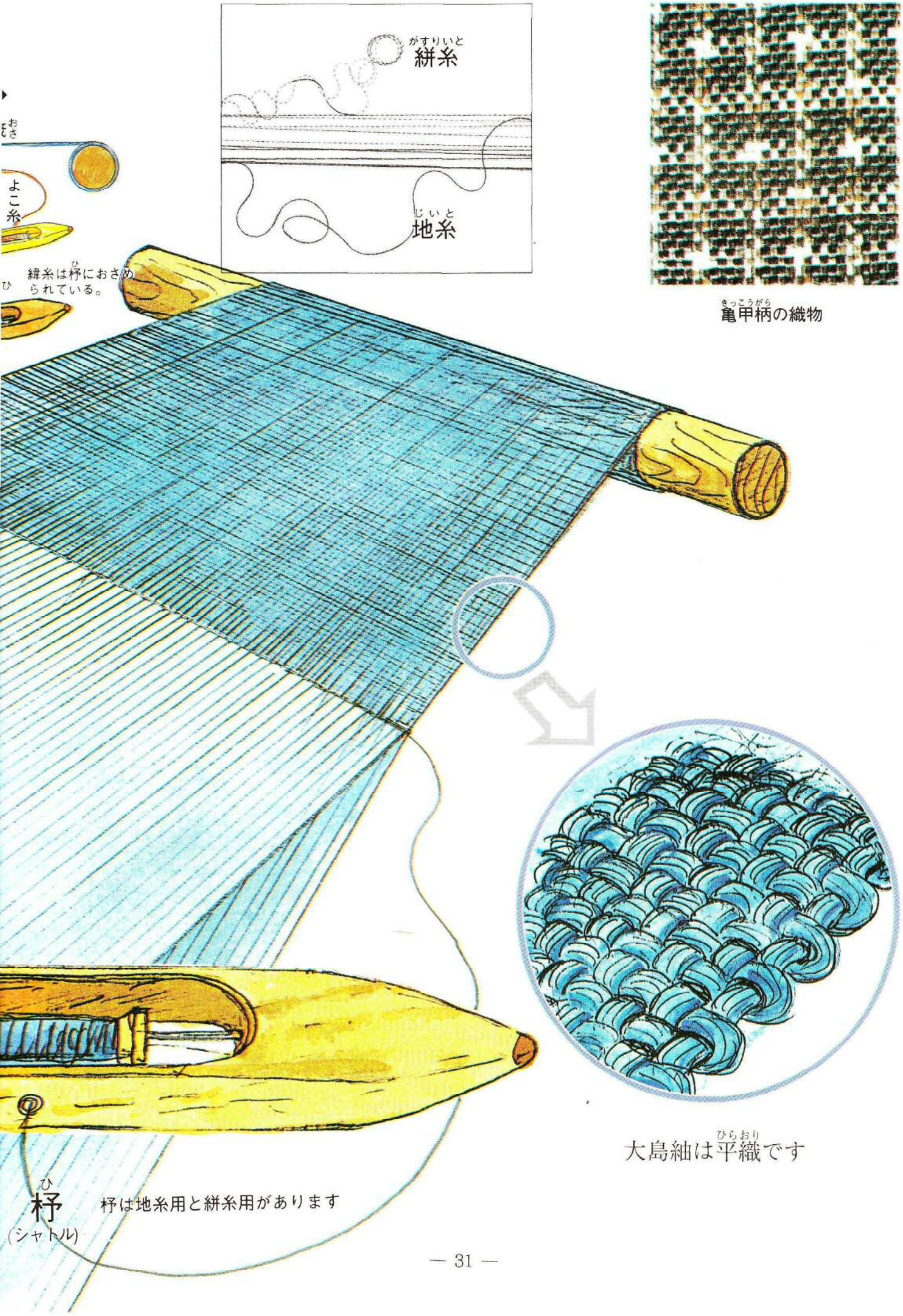

## 絣糸でもようができるわけ

(実際は、糸と糸の間にはすき間がありません。)




たて糸の本数は、筬の密度(算)と、筬の幅で決まります。
15.5よみ(1240本)がよく使われます。
13よみ、18よみの製品もあります。
たてかすり糸の本数はマルキという単位で表わされます。1マルキはかすり糸80本で5.8マルキ(絣糸466本)、7.2マルキ、9.6マルキ(絣糸770本)等があります。




絣糸
地糸
亀甲柄の織物
よこ糸
緯糸は杼におさめられている。
大島紬は平織です
杼
(シャトル)
杼は地糸用と絣糸用があります

# わたしたちの大島紬

1995年　3月　第1版発行
2011年　2月　第5版発行
編集　鹿児島県工業技術センター大島紬部
発行　（旧：鹿児島県大島紬技術指導センター）
〒894-0068　奄美市名瀬浦上町48番地1
電話　0997－52－0068
印刷　㈲奄美新生社印刷
奄美市名瀬浦上字ヤン川683番地
電話　0997－52－5915

テーチ木の花
（シャリンバイ）